
夢。

R-third

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢。

【Nコード】

N8757K

【作者名】

R - t h i r d

【あらすじ】

久しぶりに、夢を見た。

あの夏の日の、彼女の『言葉』。

あの夏の日の、彼女の、『微笑』。

あれは、現実？

…それとも、夢？

（前書き）

短大時代の、『夏の日』の出来事を書いてみました。
内容的には、読まれた方によってかなり受け止め方が異なる気がします…。

久しぶりに、あの日の夢を見た。

あれは、現実？

…それとも、夢？

…今となつては、確認する術すべもないのだけれど。

3年ほど前の夏。

その日は、驚異的な暑さで。

私は短大の校舎に向かいながら、無意識のうちに何度も呟いていた。

「暑〜いっ!」

下を向いて、必死に日差しと闘いながら歩く私。

ふと前を見ると、ちょうど帰るところだったのか、一人の女生徒がこちらに向かつてゆつたりと歩いてきた。

…暑い中彼女は、黒い長そでのTシャツを着て、その上しつかり真っ黒な日傘まで差していた。

彼女と私は学部が異なつた為、話した事は無かった。

それでも私は、彼女の事を知っていた。

なぜなら彼女は、とても目立つ存在だったから。

何処か外国からの帰国子女だという彼女は、恐ろしい程に白い肌をしていた。

茶色く大きな瞳も、それに合わせたかのようなふわふわにカールした栗毛も、不自然なほど赤い唇も、どれも日本人離れしていた。彼女はまるで丁寧に作られた、フランス人形の様な愛らしさだった。

…美少女も、大変だな。

…このくそ暑い中、そこまでして肌を守らなきゃいけないのか？

ちょっと呆れながら、私は視線を上げて彼女の方をちらりと盗み見た。

通り過ぎる瞬間、彼女はクスリと笑った。

「だって、仕方ないじゃない。

…私、吸血鬼だから。」

啞然として見上げると、彼女は艶やかに微笑んだ。

女の私でも目を奪われるほど、色っぽい表情で。

それから彼女はまた、ゆっくりと歩いて行ってしまった。

その後私は、彼女と特に接点を持たないまま、短大を卒業した。もちろん彼女が本当に吸血鬼だなんて、信じたわけじゃない。

…でも彼女はなぜ、私にあんな事を言ったんだろう？

私は今でも、時々夢を見る。

まるで彼女のあの言葉と微笑が、呪縛であつたかのように。

（後書き）

皆様、こんばんは。『R - t h i r d』です。
呼びにくかったら、『3号』とお呼びください。

さて、今回の短編。

読まれた方によって、受け止め方がかなり異なる気がします。
今では『彼女』の名前すら思い出せませんが、それでも私は時々夢に見ます。

『彼女』と同じ学部の友人に、それとなく聞いてみたことがあります。

『彼女』は冗談とか、言うタイプなのかって。

答えは皆、『NO』でした。

ほとんど人と会話することなく、時間が余った時はいつも一人で本を読んだりしていたそうです。

だから、冗談とか言うのは聞いた事が無いとの事。

吸血鬼なんてもの、信じてるわけではありません。

気になるのは、なぜ話した事もない私にそんな事を言ったのか、という事。

ただ、それだけです。

…そんなにジロジロとは、見てなかった筈なんだけど。
なんだか3号の中で、忘れられない存在だったりします。

最後までお読み頂いた方、いらっしやったら本当にありがとうございます。

いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8757k/>

夢。

2010年10月28日02時46分発行